13

本邦嚆矢の産院設立者 村松志保子の安生堂とその慈善事業

石原　力[1]・原島早智子[2]

1）村松志保子研究会・賛育会清風園診療所
2）村松志保子研究会

村松志保子（一八五六～一九二二）の事績は長く埋もれていたが、墨田区文化財調査員原島早智子により発掘され、一九九九年以来の調査記録は三部作として発刊、二〇〇四年四月には「村松志保子研究会」が、五年一月「村松志保子助産師顕彰会」も発足した。ただ学会での報告はまだなく、その多彩な活動のうち、産科方面に限って報告する。谷中霊園の志保子の墓碑には一九二二年鈴木於兎助の撰文があり、要を得ているので引用する。

「女史名は志保子、姓は村松氏。家はもと沼田藩主土岐侯に仕え、考［亡父］は玄庵先生といい、医を善くして侯の侍医たり。母和歌子は中村氏、藩老官兵衛の長女なり。女史生れて穎悟、先生これを奇とし、贅婿［入り婿］を納れて配と為すも諧がず。ここに於て女史自立の志あり。嘗ておもえらく、助産術は世道に於て固より緊要の学たり。而して旧俗之を賤手に委ねて顧みざるは、済生［広く民を済う］に務めを開く所以に非ざるなり。乃ち刻苦研鑽して学成る。明治十五年門戸を創立し、安生堂と称す。業を執り弟子を養いて名声大いに起る。二十一年産婆学校を興し、二十三年産院を興して称説［ほめたたえる］され、施療室に貧困の妊婦を収容す。これ木朝産院の嚆矢たり。江湖の篤志の士女及び慈善団体にして援護を為す者頗る多し。二十四年九月北白川宮、小松宮両妃殿下賜金にて嘉奨せらる。［後の］露帝尼古拉斯二世亦貨を餽りてその業を賛す。女史の栄ここに至りて極まれり。方に東京府東京産婆会を起すや、第六支部長兼本部幹事と為り、次いで本部副長に挙がるも、未だ幾ならずして退会す。江東産婆会起るに及び、更に女史を推して長となす。後江東産婆組合と改称し、よってこれが長となる。女史人となり沈静にして惑わず、精力人に過ぐ。忙、劇

しく在りといえども急遽の色無し。自らいう、睡りを取るは三時間にて足ると。書を読み、業を務め、自若として倦まず。夙嫻［幼時より上品］、儀礼は巧み、書画善く、倭歌至り、弾箏、点茶、插花の技は、皆その妙に詣らざる無し。親に事えては至高。玄庵先生八十の高齢を以て逝く、女史の悲慟［泣く］、思慕已まず。之を谷中天王寺の非域に葬る。母中村氏、経紀［家政］、家事を能くし、女史をして専心業務に服せしむ。女史また色養［親の顔色でよく仕える］怠り無し。大正十一年一月二十三日病を得、二十六日を越えて終に起たず。女史安政三年七月二十三日を以て生れ、享年六十有九。天王寺の先考の墓側に葬る。法諡は松光院仁道慈生大姉という。葬の日門弟子の来会数百人、哀痛は考妣［父母］を喪うが如し。朝野の名士弔に臨み、また甚だ多しという。女史子無く、福島の人鈴木章の弟範亮を養いて嗣となし、東京の人鈴木於兎之助の女安子を以て之に女す。」

産院は、明治二十四年佐伯理一郎の京都産院が最初とされてきた。志保子の安生堂産院は二十三年であり、我国最初となる。産院の二要件として、医師（当時産科又は内外科）の存在と、貧困者の助産が挙げられよう。

明治二十五年三月二十日の読売新聞に、産医家志保子の履歴を原島が発見したが、これによると私塾済生学舎で女医を志し、東京産婆養成所［私立東京産婆学校は十三年四月設立］を十四年三月卒業している。女子の医術開業試験出願は認めない（十四年五月九日内務省）時代、志保子は医術開業免許は持てなかったが、従来開業医師で内外科免状を持つ父玄庵が安生堂医院におり、産院の要件は満たしている。夫の村松碩三は官公立医療機関での奉職履歴で明治十七年三～四月に免状を下付されたが、後に離縁となった。

一方自費と、施費（無料十床）の安生堂産院慈善事業支援の為、二十四年以後皇族や華族、渋沢栄一等諸名士、慈善歌舞伎や鹿鳴館舞踏会の寄付もあった。慈善の思想は師の長谷川泰の済生や、彼女の設立した淑女館の英人Miss Braxton Hicksの影響大と思われる。